

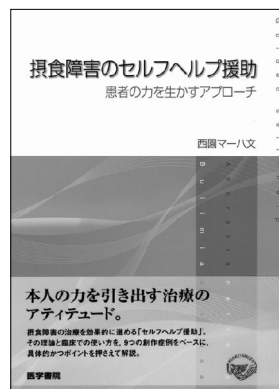
『摂食障害のセルフヘルプ援助

患者の力を生かすアプローチ』

看護教育は「学生の力を生かす教育をしているか？」という問い—指導ではない援助を考える

著：西園マーハ文／定価：3,570 円(本体 3,400 円＋税 5%)

発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書は、摂食障害の治療において、『本人のセルフヘルプを援助する』姿勢が非常に重要なのではないかと著者の姿勢に基づいて書かれている。著者がイギリスで研究していた時期に、医療システムや組織の違いを超えて、多くの学びの基本にあったのが、こうした治療態度であったという。本来どんな患者であれ、もともとその人が持っている力を最大限に活用できるような支援が重要であるはずなのだが、そうしたことに着目できなくなっている日本の医療制度や現場の問題も大きいかもしれない。また、摂食障害は、看護学生にも決して珍しくない疾患である。単なるダイエット、失恋やいじめ等がきっかけであることも多いが、背景には複雑な家族問題やトラウマが隠れている場合もある。加えて、学生自身が自ら不調を訴えて相談に来る場合はまれで、どちらかという周囲に気づかれて問題が浮上するケースが多いのではない。治療に繋がっても、症状が遷延化する場合もあり、危機的身体症状やうつ・自傷行為など、さまざまな合併症を呈する場合は特に、この疾患そのものをどのように理解し、どのような関わりが、摂食障害を抱える学生への支援になるのかと思悩む教員も多いのではないだろう。

そのためにも、教員が学生のセルフヘルプを援助する姿勢で関わることで、学生の成長や治療、疾患からの回復を援助することにつながるのでは

ないかと私は考えるのだが、実際は、複数の教員でこうした情報を共有し、学生の支援体制を整えていくことは思いのほか容易なことではないかもしれない。しかし、こうした姿勢は、看護教育現場にも大変重要で、こうした教員のかかわりが学生に対して、患者への看護ケアのモデルにもなりうるのではないかと私は考えている。本書の実践編では、臨場感あふれる架空の症例が豊富に書かれている。最初からこんなに言語化できる患者はいない、と思われる方もいるだろう。しかし、援助者が自分の考えや見立てを誠実に伝え、かつ患者を尊重する姿勢を示し続けることは、患者の力を引き出す。それが、患者が新たなステップを踏み出すための、背中を押す大きな力になるということが、私の経験からも確かだと感じられる。

私は地域で摂食障害のサポートグループを主宰して6年になるが、限られた医療機関しかない地方では、当事者が孤立しないよう、限られたつながりを繋ぎとめることが非常に重要となる。摂食障害患者は、困難な状況を「摂食障害」という症状を抱えることによって、生き抜いてきた“サヴァイヴァー”であるともいえるのだ。本書は、患者のセルフヘルプを援助する目的で医療関係者向けに書かれているが、患者に限らず教育や援助を仕事とする専門家にも、患者や当事者と関わる姿勢について多くの示唆を与えてくれる本でもある。